The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	価値観の歴史から見るラスキンの固有価値論
Author(s)	橘高，彫斗；三好，恵真子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2017, 43, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60579
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

価値論の歴史から見るラスキンの固有価値論

橘　高　彫　斗・三　好　恵真子

目　次

１．はじめに
２．ラスキン思想の評価とその価値論
３．価値論史における固有価値論の位置
４．内在的価値と固有価値
５．結論

価値論の歴史から見るラスキンの固有価値論

橘　高　彫　斗・三　好　恵真子

1．はじめに

筆者らは、自然および文化に固有の価値があるとの考え方に着目する中で、人々がそれをどのように受容しているかということ、すなわち価値受容の過程は必ずしも明確でないとの問題意識を持つに至り、これを考察するため主に文化経済学に依拠して検討を進めてきた。もちろんこれは、自然環境や文化的財の保護における経済的な評価手法の問題を視野に入れているためであるが、それはさておき、自然や文化に固有価値があるというとらえ方がそもそも妥当なのかどうか、その辺りが未だ明確でないと言える。対象に価値が内在する (intrinsic) という意味での固有価値というとらえ方自体は、素朴で自明的なものに思える。しかし、この固有価値なるものを自らの価値論の中枢に意識的に据えた思想家がかつていたことにも、筆者らは強い関心を持っている。それは、19 世紀イギリスの美術批評家にして経済思想家であったジョン・ラスキンである。我々はこれまで、このラスキンの価値思想を、慣例にしたがって「固有価値論」と呼称し、種々の視点から考察を加えてきた。

まず、ラスキンにおける価値の「受容能力」の概念が機能主義的特徴を有することに着目し[1)]、人間を含めた生物全般と環境の機能主義的な関係性を説明する試みとして、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの提唱した「環世界」の概念を用い、受容能力概念との類似性および差異について検討した[2)]。続いて、自然および文化の固有価値を供給する母体として、経済的な資本の概念に基づく「文化的自然資本」を想定し、これと受容能力との関係性について改めて機能主義的観点から検討すると共に、この観点を図式化した「膜モデル」を提案して、独自の説明を試みた[3)]。他方、文化的自然資本としての風景と固有価値論との関係、さらに経済的価値概念としての効用と固有価値論との関係を踏まえた上で、記号学の観点から改めて固有価値論を説明する試みとして、チャールズ・サンダース・パースの記号学を取り上げると共に、この記号学的観点から見直した改良型の「膜モデル」を提示した[4)]。

こうした研究の変遷を経て、我々は、固有価値論における価値受容の過程が、目的論的な推論過程としての「アブダクション」であることをパース記号学の観点から明らかにし、それを踏まえた上で、固有価値論と効用理論との相違点を明確化するため「記号

学的膜モデル」による図式化を行なった（橘高 , 2015）。その後、我々の関心は、固有価値論における価値受容の過程から、固有価値そのもののあり方へと移ってきている。その一端として、ラスキンの建築論を取り上げることにより、文化的な固有価値を有していると考えられるロマネスクおよびゴシック建築が、その価値の要素として、柱や階層の間隔に見られる比例の法則性や、そこから逸脱する特殊性を持つことに着目し、これをパースの現象学の観点から検討した[5)]。さらに同様のアプローチから、固有価値を有すると考えられる絵画芸術における色彩と形態の相関性に着目し、色彩表現に関する理論の妥当性をラスキンがどのように確定していたかを検討した（橘高 , 2016）。

以上のような検討は、ラスキンの固有価値論の中に現代における実践的な意義を見出そうとする意図に基づくものだったと言える。しかし、こうした現代的な意図の下に過去の思想を扱う場合、シュンペーターも指摘しているように、そこへ際限なく新たな見解を加えることもまた可能である。これは、まかり間違えれば、自らの実践的な主張を補強するために過去の思想を恣意的に借用していると見なされかねない事態であるだろう。「固有価値論」と呼ばれる思想についても、ラスキン自身がそのような言葉で呼称していた訳ではなく、「固有価値と受容能力が相伴う場合にこそ、実効的価値すなわち富が存する」と彼が語ったことに対して (Ruskin, 1872)、後の研究者が仮設的に名付けたに過ぎない点に注意する必要がある。つまりここには、ラスキン自身の真意としての固有価値論と、後代の研究者たちが期待を込めて解説する固有価値論との二種が現れていると言える。我々のこれまでの検討も、後者のそれに近い幾分牽強付会とも言える姿勢だったのは確かだろう。

ラスキンの著作を解読することが、すでにして何らかの価値論的視点を持つのは避けられないことであり、そうすると我々はラスキンに敬意を払いつつ、その思想を評価し、我々にとって不足と感じる側面に補強を加えて他の研究者の実用に供する以外に、これを研究する意義は見当たらないとも言える。しかし、その場合にも、価値論とは何かが明確ではないという問題は残る。山下 (1968) も述べているように、価値論なるものが一つの学として体系化されているかと言えば、未だにそのようなものは存在しないのである。これまでのラスキン評価の論者らは、固有価値論の実際的な効果の側面に着目して解説することを「価値論」的と見なしていた傾向があり、価値論的視点そのものを問い直すという作業を回避していたと言わなければならない。価値論的視点とは、つまり何に価値があり何に価値がないかといった価値規範の表明ではなく、その表明に現れる言明様式を意識することであると筆者らは考えている。我々が種々の価値論の特徴を検討する際には、その価値がどのように言明されているかに注意せざるを得ない。筆者らの考える価値論とは、単に価値判断の基準や規範を表明するものではなく、その言明様式にまで言及して分析するものである。

本稿では、こうした考え方に基づいて、ラスキンの固有価値論を他の価値論と比較検討した上で、これを価値論史の中に位置付けることを目的とする。第二章では、ラスキ

ン思想に対するこれまでの評価を概観する。そこには、肯定的なものも否定的なものも混淆しているのであるが、固有価値論そのものを対象とした評価は最近になって現れたのであり、その数も決して多くない[6)]。これらは、現代の経済的な価値評価ではカバーし切れない文化的領域の価値評価を改めて経済学に含める上で、労働価値や効用などの経済価値論とは異なる価値思想として提示されたラスキンの固有価値論が有効であるとの考えから、これを再評価するものである。しかし、何故それが文化的領域の価値評価にとって有効であるのか、それは必然なのかという疑問が湧いてくる。例えば、「固有価値とは固有性の価値である」と定義した上で、文化的領域における「固有価値には固有性がある」という事実を示すことによって「固有価値には価値がある」と結論付けるならば、それはつまり、固有価値を正当化するために、それが他の価値よりも「価値がある」という根拠を固有価値自身に求めていることになるだろう。こうした問題はやはり、固有価値論の言明様式を検討することでしか解消できないと思われるのである。

第三章では、種々の価値論がどのように語られてきたかを明らかにし、そこへ固有価値論を位置付けることを試みる。まず、「価値論の歴史」ないし「価値論史」と銘打たれた論考を見ることで種々の価値論を総覧するが、結果的にこのタイプの著述は少ないと言える。他に、「価値論」、「価値」といった言葉を含む論考を渉猟することで価値論の分類を試みるが、概ね、哲学的価値論、経済価値論、倫理学的価値論の三種に分かれることがわかる。哲学的価値論というのは、新カント派の価値哲学を指す固有名詞とも言えるものであり、しかも日本の論者は経済学者である場合が多いという奇妙な事実が見られる。他方、経済価値論というのは、実際にはスミス以前の価値論史を指す場合がほとんどであり、スミス以降のそれは経済学史や経済学説史に包摂される。こうした中で、固有価値論を古典学派や効用理論に関わらせて論述した Throsby(2001) が注目に値する。さらに筆者らは、倫理学的価値論において Moore(1903) が提示した「内在的価値」の概念に着目する。

第四章では、これまでで見えてきた二つの問題、すなわち文化的領域の価値評価において何故固有価値論が有効と考えられるのか、そして固有価値論はムーアの言う自然主義的誤謬に当たるのではないか、ということについて検討する。前者の問題は、我々が文化に対して抱く絶対的な評価を求める感性が、こうした考え方をもたらすと説明できる。また後者の問題については、ムーアにおける善の性質の解釈に難航し、明確な判定はできないものの、仮に固有価値論が自然主義的誤謬に当たる場合に、固有価値をムーアの内在的価値から区別するため、別のとらえ方の可能性を探る。最後に、第五章において結論を述べることとする。

2．ラスキン思想の評価とその価値論

ジョン・ラスキンは、その芸術批評に発揮された類稀な能力と情熱に対して高い評価

を得ている一方、その政治経済思想に関しては、長い間評価の定まらない人物であった。本章における筆者らの関心は、この評価の難しい彼の政治経済思想の中でも、特に固有価値の概念に着目し再検討するところにある。それはやはり、現代の我々から見て、この価値思想が興味深い特徴と意義を持っているからである。しかしここでは、筆者らの意図は全面に出さず、あくまでも中立的な視点でラスキン思想に対する評価を概観していくこととする。

ラスキンの政治経済思想、それは「生なくして富なし」や「最大多数の高潔にして幸福な人」などの言葉でよく知られた (Ruskin, 1862)、いわゆる「ポリティカル・エコノミー」の思想であったが、これに対する初期の肯定的な評価としては、Smart(1880)、Geddes(1884)、Stimson(1888)、Hobson(1898, 1914) などが挙げられる。例えばゲデスは、独特の生物学の観点からラスキン思想の特徴をとらえ、ホブソンは、ラスキン思想の持つ生命重視の姿勢を科学的目標でもあると評価している。ラスキン評価はその後、木村 (1949) が総括しているように、「マーカンタイル・エコノミー」の支配するヴィクトリア時代の社会を批判し、社会主義の到来を予言した点にラスキンの特質を見ようとするものと、貴族的、耽美的な性格や形而上学的、神学的な側面を科学の時代に逆行するものと見てラスキン思想の棄却に向かったものとに分かれる訳である（木村 , 1949）。前者の筆頭は、劇作家、批評家として有名なバーナード・ショウによる講演 (Shaw, 1921)、およびそれを継承した河上肇 (1917, 1918) であり、後者については、大熊信行 (1921) による解釈、すなわちラスキンはあくまでも「職分思想」の提唱者であり、むしろモリスの経済思想の方に重要性があったとする見解が代表的とされる。この大熊の譲歩的な見解が、その後のラスキン評価の「抹殺」を招きながらも、ラスキンを擁護する一部の「講壇派」によってその評価は細々と受け継がれていたと木村は指摘している（木村 , 1953）。

この抹殺の好例として、Schumpeter(1954) を挙げることができるだろう。彼は、ラスキンが芸術批評に天才的な努力を傾けたのに対して、「経済学においては、彼はなんら同じような努力をなさなかった」とし、それは「一知半解の観察や未消化の読書の断片に対して、憤懣の念を惜し気もなく追加するに過ぎない」のであり、「ホブスンのような著作家を例外として、彼を（分析的経済学者として）一顧の価値もないものたらしめるのは、まさに此の点にほかならない」とまで断じている。他方、最近のラスキン評価の例として西沢 (2014) は、ホブソンを厚生経済学の源流の一つと見ることにより、そのホブソンに影響を与えたラスキンにおける生を重視する思想もまた厚生経済学の源流に含めてとらえられるとの立場を示している。これは、ケンブリッジ学派のピグーが、シジウィックにおける「富（価値）と厚生（効用）の分離」に賛同し「富の理論への厚生アプローチ」を提示して厚生経済学の原点となったのとは対照的に、いわばオックスフォード派の厚生経済学とも言えるものである（西沢 , 2014）。

こうした政治経済思想への評価とはやや異なり、ラスキンにおける「富」や「価値」の概念の持つユニークさを現代の視点から積極的に評価したものとして、池上 (1991,

2003) および Throsby(2001, 2011) を挙げることができる。池上 (1991) は、厳密に言うと、富や価値そのものよりもその受容過程 (池上によると享受能力）に関するラスキンの議論を評価している。ここで、ラスキンにおける富の概念を簡単に説明するならば、それは人の生を善きもの豊かなものとするような財、すなわち清浄な環境や芸術文化ということになる (Ruskin, 1872)。そして、こうした富の持つ価値とは、人を勇気付ける「固有の力」であり、それは喜びに満ちた創造的労働により生産される。しかしながらラスキンは、富とは「交換価値を有するすべての有用にして快適なもの」と定義するミルの見解に対して、「経済的有用性は、ただそのもの自身の性質によるだけでなく、そのものを使用でき、またそれを使用するであろう人々の数による」と指摘し、需要側の状況、すなわち「人間の能力」にも目を向けるのである (Ruskin, 1862)。池上はこの点に関連して、「ラスキンの定義によると固有価値は自然や物質そのものの内在的な性質、あるいは属性である」が、むしろ「清浄な空気や美しい草花は、それ自体が固有価値を持つのではなくて、知的な資産を継承し固有価値の存在を認識した人間が自然を愛し自然に美しさを見出し自然に希望を見出すが故に、ある個性や地域性をもった空気や草花を固有価値の担い手として位置付け、評価するのである」と、需要側に力点を置いた解釈を示している（池上 , 1991）。

さらに池上は、ラスキンから一旦離れることにより、現代的視点で固有価値を再定義している。つまり、固有価値は「移転性」と「非消費性」を持つ知的創作物＝情報であり、オリジナルの情報が商品に移転しコピーされることで市場での交換が可能となったものである。また固有価値は、環境経済学における存在価値やオプション価値などと同様に、通常の財としては扱えない価値であり、マーシャルの定義した外部性の観点から扱えるものだとも述べている（池上 , 2003）。こうした視点を強調する上で池上は、古典学派の価値論とラスキンの価値論を対比させ、スミスやリカードやミルなどの時代の価値は「効用、すなわち財の性質」を意味していたが、ラスキンにおける価値は「財を使用する人の能力に依存するもの」であると、先ほどと同様の見解を示している（池上 , 2003）。他方、交換を重視するスミスの見解、すなわち「人間の才能は交換を通じて価値として顕在化し、高度な知識として共有される」という点にも着目し、やはり才能すなわち「能力」を共有することの重視性を指摘している（池上 , 1991）。

Throsby(2001) もまた、固有価値そのものではなく、価値の生産過程すなわち創造性に関するラスキンの議論を評価している。スロスビーは、労働者の生を充実させる労働により生産された財に、その生の充実が「移転」したものこそが固有価値であると解釈し、そこに固有価値を再評価する意義を見出している (Throsby, 2001)。そもそもスロスビーは、「固有価値」という言葉を用いる際にラスキンのみを念頭に置いている訳ではなく、スミスやリカードの労働価値説も含めた上で、それらの特徴を一般名詞的に「固有価値」もしくは「絶対価値」と呼んでいる (Throsby, 2001)。こうした一般的な「固有価値」の現れる領域が文化的領域であり、そこでの伝統として、「芸術作品の正確な価値を、それ

が持つ、美学的、芸術的、あるいはより広い文化的な有用性という固有の性質にあると見る」とらえ方があると述べている (Throsby, 2001)。また、この文化的価値を産出する原資としての文化資本を、ラスキンにおける「蓄積」(accumulation) の概念を用いることで説明しようと試みている (Throsby, 2011)。

筆者らがラスキン思想に関心を持つ理由も、こうした池上やスロスビーらの視点と同じく、固有価値に現代的な意義を見出すところにあるのは確かである。しかしながら、固有価値論は効用理論よりも「価値がある」といった判断が、何を根拠とするものなのかは、やはり明確とは言えないのである。したがって我々は、固有価値の受容過程や生産過程についてよりも、固有価値論の持つ言明様式について検討すべきだと考える。ここで、ラスキンの固有価値論における言明様式がどのようなものか簡単に確認しておこう。ラスキンは、固有価値とは「人の生を支持すべき絶対的力」であると述べている (Ruskin, 1872)。この価値は、「人の思惑とかものの量には無関係」であり、「使用されると否とを問わず」ものに内在する、生を強める不変的な力、すなわち「ヴァロール (valor)」とされる (Ruskin, 1862)。例えばそれは、「一束の小麦」の持つ「人体の実質を保持する一の計量可能な力」であり、あるいは「清浄な空気」の持つ「人間の体温を保持する一の固定した力」、あるいはまた「一定の美しさの一群の草花」の持つ「諸感覚および心情を鼓舞し活気づける一の固定した力」とされる (Ruskin, 1872)。

これらの記述は、固有価値論のいわば心臓部に当たるところと言えるが、その主旨を要約すると、やはり「固有価値とは人の生を支持する絶対的力である」となるだろう。ところで、我々が生活の様々な局面で下している判断には、概ね三種のものがあると考えられる。これらを固有価値論の言明に関わらせて例示するならば、「ある種の事物は人の心を鼓舞し活気付ける」、「人の心を鼓舞し活気付ける事物は善い」、「我々は人の心を鼓舞し活気付けるべきだ」となるだろうか。ここに現れているのは、事実の判断、事実に対する価値の判断、そしてそれらを超え出た道徳的な判断である。そこで、再びラスキンによる言明、「固有価値とは生を支持する絶対的力である」を考えてみると、これは事実判断の形式となっているようにも見える。しかし、「固有価値」という言葉に含まれる「価値」は、言い換えれば「善いこと」であり、「固有価値」とは「固有の善いこと」ととらえることができる。すると、先の言明は、「固有の善いこととは生を支持する絶対的力である」と言い換えられ、これは「人の心を鼓舞し活気付ける事物は善い」と同じく、確かに価値判断の言明となっているのである。

ところが、この「固有の善いこと」が、「生を支持する絶対的力」に適用されているということは、元々善いことでも悪いことでもなかった事実判断としての「生を支持する絶対的力」に、新たに「固有の善いこと」という価値判断を結び付けているということでもある。それこそが価値判断でもある訳であるが、もしこの「固有の善いこと」を、「快楽」に結び付けるとしたらどうだろうか。やはりそれも、一つの価値判断ではあるだろうが、これをさらに、「快楽のみが固有の善いこと」であると述べるならば、その快楽主義的な

物言いに対してやや抵抗感を持つのではないだろうか。Moore(1903) は、こうした快楽主義的な主張に対して、それが「自然的対象」としての「快楽」と「非自然的対象」としての「善」を混同する「自然主義的誤謬」に当たると批判している。つまりムーアは、「善」を自然的な対象とは異なる、何か特別なものと見ている訳である。このことからすると、先ほどの固有価値論の言明も、自然的対象である「生を支持する絶対的力」と非自然的対象である「固有の善いこと」とを混同する自然主義的誤謬ではないかとの懸念が生じる。これが本当に誤謬であるのかと問われれば、それはムーア自身の主観的判断に依存するように筆者らには思えなくもない。しかし今は、これが誤謬かどうかの判断は保留したまま先へ進もうと思う。次章以降では、こうした点にも留意しながら検討を進めていきたい。

3．価値論史における固有価値論の位置

本章では、種々の価値論を歴史的に見ていきながら、そこに固有価値論がどう位置付けられるかについて検討していく。ところで、「価値論の歴史」もしくは「価値論史」と銘打たれた研究はそれほど多くないと思われる。日本では、おそらく杉村廣蔵の「価値論史」（杉村 , 1931）が嚆矢と言えるものであり、その後には山下 (1968) による「価値研究の歴史」（岩波講座哲学 9 所収）が続くくらいではないだろうか。やや近いものとして、鈴木 (1991) による『経済学前史と価値論的要素』を挙げられるかも知れない。これらのうち、杉村は、新カント派の価値哲学を中心に取り上げたいわば「哲学史」の体裁をとっており、山下は、範囲としては古代ギリシアから現代までをカバーしつつ、むしろ種々の価値論を哲学的観点から分類し系譜的に整理したものとなっている。具体的には、価値と存在の分離説と非分離説、価値的相対主義と絶対主義、価値実在論と価値唯名論、客観的価値説と主観的価値説、価値の計算可能性と不可能性という五つの分類である。鈴木は、価値論の対象をスミス以前の経済学に限定したものであり、アリストテレスの使用価値と交換価値、アクィナスの公正価格、ペティの自然価格と労働価値論、ロックの需要説における内在的価値論などを扱っている。英文献で「価値論史」に相当するものとしては、Sewall(1901) による“The Theory of Value before Adam Smith”（邦訳『価値論前史』）、Stigler(1950) による“The Development of Utility Theory”、Oates(1963) による“Aristotle and the problem of value”などを挙げられるのではないだろうか。Sewall は、鈴木と同じくスミス以前の経済価値論を扱ったものであり、Stigler は、近代以降の効用理論の発展史を扱ったもの、Oates は、アリストテレスにおける存在と価値の分離に焦点を当てて検討したものである。

これらの他に、「価値」もしくは「価値論」をタイトルに含む研究がいくつかある。まず経済哲学の観点から文化価値について論じた杉村 (1933) による「文化価値主義の経済哲学」（経済学全集 9 所収）や、価値哲学について論じた大江 (1957) による『哲学的価

値論の研究』などは初期の価値論と言えるだろう。続いて、倫理学の観点から価値について論じたものとして、碧海 (1968) による「事実と価値」（岩波講座哲学 9 所収）、金子編 (1972) による『価値』、小倉編 (1973) による『価値の哲学』などが挙げられる。また、この時期の総括的な議論として小山 (1968) による「価値研究の課題」（岩波講座哲学 9 所収）がある。さらに、マルクスの価値論について取り上げたものとして、渡植 (1972) による『経済価値の社会学』、小幡 (1988) による『価値論の展開』、山口 (1996) による『価値論・方法論の諸問題』などが見られる。英文献としては、言語分析の手法により価値を検討したものとして、Hall(1952) による“What is Value? An Essay in Philosophical Analysis”、同じく Hall(1961) による“Our Knowledge of Fact and Value”があり、また経済学の観点から文化的価値について論じたものとして、Conner(1991) による“Theory and Cultural Value”、Throsby(2003) による“Determining the Value of Cultural Goods”、Hutter(2006) による“Value and Valuation of Art in Economic and Aesthetic Theory”などが挙げられるだろう。

以上から見えてくるのは、価値論には主に哲学、経済学、そして倫理学の領域があるということである。我が国で最も早い時期に価値論に目を向けたのは、おそらく経済哲学者の左右田喜一郎であったと思われる。その思想は、新カント派の一つドイツ西南学派における「文化価値」の概念に端を発する哲学的価値論ないし価値哲学であった。つまり日本において価値論は当初、哲学と経済学が交流する「経済哲学」の領域で語られていたと言える。大江 (1957) によると、新カント派のロッツェにおける「妥当」の概念を継承したヴィンデルバンドは、「価値問題について、心理学的要素にも顧慮して価値を欲求の満足とか情緒的感受性によって把捉されると考え」たのであり、「価値に情緒的要素あるいは心情のいわば軟らかみあるいは温かさ」を加えたとされる。また、「価値は先験的規範（ノルム）であり、その規範を自覚する精神能力が規範意識であって、その規範意識が価値判断をなし、人間を価値実現に向かわしめる」と説明している（大江 , 1957）。なお、左右田に師事した杉村廣蔵は、上述した「価値論史」（杉村 , 1933）という小論を著し、その中で、価値の問題は倫理学および美学のみならず哲学における「認識問題」にも関わっており、近代以降「実在の問題を別にして哲学問題の他の領域はことごとく価値の問題によって蔽われる」こととなり「中枢的重要をかち得るようになった」と指摘した上で、「価値論の通念からいうとこの価値哲学の他になお価値心理学、経済価値論をも顧みなくてはならぬ。広義にはこの三つの学問的範囲にふれたものが価値論である」と述べている（杉村 , 1931）。

このように元来、哲学的価値論と経済価値論は分けてとらえられる傾向があったのであり、これについて杉村 (1931) は、「哲学問題としての価値論という視点からは経済価値論は経験科学の問題というだけで論外に置かれる理由はある」とし、それは経済学者たちが「『価値論のない経済学』の体系の正しいことを証明しようとして居る」ためであるとの見解を示している。最近では伊藤 (2010) が、やはりこうした哲学と経済学の交流

について、「我が国のみならず欧米においても不思議なくらい少なかった」と指摘し、高橋誠一郎による『経済学前史』（高橋 , 1929）などの労作が、我が国における経済哲学の先駆的な意義を持つと評価している。さらに伊藤独自の問題意識から、哲学史と経済学の接点における「知的洞察」の例として、ケインズの『確率論』と、ラスキンの経済学批判におけるミルと古代ギリシアのクセノフォンおよびプラトンとの対比を取り上げ検討している（伊藤 , 2010）。筆者らをはじめ、近年、ラスキンの思想を再評価する傾向が見られるのは、こうした哲学と経済学の接点に再び目を向ける一つの兆しともとれる。

では、その経済価値論についてであるが、一般的にスミス以降は、古典学派の労働価値説とオーストリア学派、ローザンヌ学派、ケンブリッジ学派の限界効用学説の議論を主流として、それに終始すると言えるだろう。これら諸学派の価値論に関する研究は、経済学史や経済学説史として数多く著わされており、ここでは代表的なものとして、Schumpeter(1954) による “History of Economic Analysis” および杉本 (1981) による『近代経済学の解明』を挙げておく。しかし、筆者らが特に取り上げたいのは、Throsby(2001) における経済価値論に関するごく簡単な記述である。というのも、このわずか 4 ページほどの記述の中に、古典学派からラスキンの固有価値を経て効用理論に至る価値論史の流れが収められているからである。固有価値論を価値論史に位置付けたものとして、おそらく唯一ではないだろうか。スロスビーは、まずスミスの『国富論』が価値論を考える上での出発点になるとし、スミスは「使用価値、すなわち、それがもつ人間の欲求を満たす力と、交換価値、すなわち、その財を一単位得るために人が放棄する用意のある他の財やサービスの量」を区別した最初の人物であると述べている (Throsby, 2001)。

続いて、スミス、リカード、マルクスが、「価値は財に具現化された労働の量によって決まる」とする労働価値論を定式化し、これに基づいて所得分配のルールが示されたとしている (Throsby, 2001)。スロスビーは、ここで一旦ロックやペティに起源を持つ「自然価格」について触れた後、これに関連する不変の価値の概念として「絶対価値」ないし「固有価値」に言及する。そして、スミスは労働価値論を絶対価値として定義し、リカードもやはり同様に、なおかつ「絶対価値」と「相対価値」を区別した [7] と指摘している (Throsby, 2001)。これに対してベイリー (Bailey, 1825) が、価値は主観的な感情であり財に固有の価値などないという批判を加え [8]、一方ラスキンは、古典学派が前提とする「財の価値が市場過程によって決定され、貨幣尺度によって測定される」という考え方が [9]、「芸術的なものの価値」すなわち「固有価値の原理を侵害するもの」であると猛烈に批判を加えた (Throsby, 2001)。つまりラスキンは、財の価値を固有価値と見る点では古典学派と同一地平上にあった訳であるが、その価値が現実的には交換の場面で決定されるという解釈に異議を唱えたのである。ラスキンによれば、財の価値は創造的労働によって形成されると共に、その正しい受容のあり方に依存して、ラスキンの言葉によれば「実効的価値」として現実的に決定されるのである (Ruskin, 1872)。

最後に、倫理学における価値の議論であるが、これは常に道徳的判断との緊張関係において現れる価値判断の問題と言える。Frankena(1973) は、価値判断の研究について、「それ自体は、価値一般の理論の一部ではあるとしても、倫理学あるいは道徳哲学の一部ではない」と見なした上で、「しかし、（道徳と関係なく）善であるものの考察もまた何が道徳的に正しいかまちがっているかの決定に含まれることになるであろう」から、やはり道徳的判断の研究に含めるべきだとしている。ところで、先の哲学的価値論で見たのと同様に、倫理学においても、狭義の価値論を哲学的価値論とし、これに経済学や心理学などの広義の価値論を含める見方がある。碧海 (1968) は、哲学的価値論の下位分類として「規範的価値論」と「メタ価値論」を据え、さらに規範的価値論の下位分類として倫理学、美学、法哲学を置いている。また広義の価値論に含まれるものを経験科学的価値論として一括し、その下位分類として社会学、文化人類学、心理学、経済学などを挙げている（碧海 , 1968）。このうちメタ価値論においては、価値判断を正当化するものは何なのか、価値判断は事実判断から導き出せるのかといったメタ倫理学的な議論が中心となっている。これは、前章で触れた自然主義批判の論者であるムーアにより始められ、そしてムーア自身により「善は定義できない」という見解が示されることで、一応終わりを見たのであるが (Moore, 1903)、言語上の問題に限定してこれを扱えば議論は可能であるとの立場を取る Hare(1981) が、「道徳的判断とは普遍化可能性を持つ指令文である」という定義を示したことでその後に続いた（加藤 , 1997）。筆者らは、最近の倫理学に関してこれ以上詳しく論ずる力を持たないが、ムーアの自然主義批判において提示された「内在的価値」の概念は、ラスキンの固有価値論との類似性が予想されることからも、価値論史上の重要な論点として次章で改めて検討することとしたい。

4．内在的価値と固有価値

本章に至って、我々の前には、固有価値論に関する二つの問題が現れてきたと言える。一つは、何故我々は文化的領域の価値評価において固有価値論が有効であると考えるのかということであり、もう一つは、固有価値論の言明自体が自然主義的誤謬に当たるのではないかということである。まず、前者の問題から考えてみよう。前章の終わりに示した倫理学的価値論の分類における、哲学的価値論と経験科学的価値論の違いから見ていくこととする。碧海 (1968) は、文化人類学が明らかにしてきた「価値の文化的多様性」、すなわち文化が異なれば価値規準も異なるという価値の相対主義的なとらえ方が、哲学にとってどのようなインプリケーションを持つかと問うている（碧海 , 1968）。この問いは、同じく経験科学に分類される経済学においても効力を持つだろう。経験科学的価値論が、狭義の哲学的価値論から除外される傾向にある理由も、この相対主義が基本的に哲学的価値論に馴染まない点にあると筆者らは考える。というのも、価値判断にはそれを実行する上で指針となる根本的な基準ないし規範があるはずであり、我々はそうした

信念を持った上で価値論なるものを考えているに違いないからである。あるいは価値の規範は、人類に共通する根本的なものである必要はないのかも知れないが、しかしそうした究極的な規範というものを一切想定せず考察を進めることに、何の意義があるのかと逆に問うてみたくなる。経済学や文化人類学などの経験科学的価値論には、やはり哲学的価値論とは相容れない、いわば事実への強い執着、これを自然主義と呼んでもいいのかも知れないが、そうした執着を易々と受け入れる素地があると思われる。

経験科学が事実に忠実であるが故に、そこから導き出される価値が相対主義的であるというのは、確かにその通りであろうが、では、例えば経済学においてこれまで扱われてきた価値がすべて相対主義的であったかと言えば、前章でも検討したように、そういう訳でもないのである。人の消費行動を観察すると、それがことごとく個人的で気まぐれな嗜好の表明にしか見えないから、価値というのは主観的で相対的なものだとする結論は、いかにも経験科学的である。しかし一方で、価値は労働が生み出すとか、財の性質として使用価値や有用性があるといったような、価値を客観的で絶対的なものととらえる素朴で自明的な見方が経済学において主流とされる時代もあったのである。筆者らが着目する固有価値も、そうした素朴な価値観念に由来するのであり、その特徴は経験科学的というよりは哲学的であると見た方がいいのかも知れない。こうした視点が現れるのは、経済学者の関心が、文化の価値の評価に向かう時であるだろう。彼らは、文化の価値が経済的価値と同じようには評価できないことを承知しつつ、何とか経済的領域へ含める手立てはないかと両者の接点を探っている。この視点は、かつて経済哲学が「文化価値」を議論の中心に据えていたこととも結び付くと筆者らは考える。ただし、経済哲学における文化価値は絶対的ではあるものの客観的ではなく、むしろ主観的な情緒と見なされた点に留意しておきたい。

現代における文化の価値の評価として最も順当なのは、スロスビーも述べているように、通常の経済的価値の評価と同じように個人の効用として文化的価値を評価する、具体的には支払意思額を推計する方向性である (Throsby, 2001)。この「効用」は、経済的な財を対象とするという意味でやはり経験科学的な価値と言えるだろうが、固有価値と決定的に異なるのは、それが対象そのものの価値ではなく個人の主観的な価値心理を指すという点にある。その意味で、先ほどの「文化価値」と、この効用による文化の評価とは同じ基盤上にあるものの、それが絶対的な一つの価値判断に到達するのか、相対的なままなのかで両者は分かれる。スロスビーが、固有価値と絶対価値を同一視していることにも十分な理由があると言える。ここでは仮設的に、固有価値と文化価値を「絶対的価値」、効用を「相対的価値」ととらえておくこととしよう。ともかく、文化を一つの経済的財と見なすことにより通常の経済的価値と同様に評価することは可能である。しかし、それが個人の主観的な関心にのみ依存する限り、絶対的な固有価値なるものは、そうした評価とは無関係に独立して存在することとなる。スロスビーは、こうした分離を「絶対論者の議論」と呼んで危惧しており、「個人の効用に疑いなく貢献するが、特殊

な性質を持つ、何らかの経験されるもの」として文化的価値を受け入れようと呼びかけている (Throsby, 2001)。さらに、例えば、「バッハの音楽に対して個人的な便益を認めることはできないが、しかし人類の栄光に寄与していると感じ取ることはできる」のであり、このタイプの財は「支払意思額によって計測できない」ともしている (Throsby, 2003)。

つまりスロスビーは、絶対的価値と相対的価値との相互交流の可能性を指摘しているのであり、この視点はラスキンの固有価値の議論とも重なることに留意しておきたい。またこうした事情は、スロスビーが自身の価値評価理論の範を求めた、環境の価値評価の領域においても同様である。Pearce(1992) は、環境の価値評価において、支払意思額による評価と共に環境そのものの「固有価値」を認めることも可能だと述べている (Pearce, 1992)。ただし、固有価値は計測が困難であり、その「効果が量的に不明であること自体は意思決定に影響しないかも知れないが、競合する複数の選択肢の違いを比較する際にその根拠を示すことが難しくなる」とも指摘している (Pearce, 1992)。おそらく我々は、文化の価値を評価する際に、それを相対的な効用や快不快の感情だけでとらえることに物足りなさを感じ、何か別の絶対的なもの、ムーアの言うような「善」それ自体を見ようとしているのではないだろうか。それが、文化的領域の価値評価において固有価値論が有効であると考える理由である。しかしここで、すぐに次の問題が現れる。その固有価値論の言明様式は、ムーアの言う自然主義的誤謬に該当するのではないかということである。

Moore(1903) は、「善いこと」すなわち「善であるもの」は、例えば「快楽」のように、「『善い』という形容詞が適用される名詞でなければならない」とし、また「形容詞が適用されるものだとすると、それは形容詞自体とは何か別のものでなくてはならない」と述べている。そして、ムーア自身「善なるものが定義できることは信じているが、善それ自体 (good itself) は定義不可能である」、すなわち「善とは善である」と主張している (Moore, 1903)。善それ自体とは、つまり「善い」という形容詞自体のことであり、ムーアはこれを「内在的価値 (intrinsic value)」とも呼ぶ。快楽自体についても同様で、「快楽は絶対に定義不可能であり、また快楽は快楽」なのである。しかし、「快楽のみが善である」、すなわち「快楽」と「善」は同じもの、あるいは「快楽は善を意味し、かつ善は快楽を意味する」と主張するならば、それは「自然的対象である『快い』あるいは『快楽』」と「自然的対象ではない『善』」を混同することであり、これをムーアは「自然主義的誤謬」と呼ぶのである。小泉 (1968) も指摘しているように、この「自然的性質と非自然的性質の区別」がムーアの価値論において最も重要な点であり、両者の違いを示せれば、彼が意図する自然主義批判も貫徹する訳である。

しかし、これについてはムーア自身も苦心しており、後に彼は、自然的性質である「黄色」と非自然的性質である「善」が、「それらの性質を所有する事物の内在的本性 (intrinsic nature) にのみ依存するという点で、同一である」ものの、「黄色が内在的固有性であるのに対して、善は内在的固有性ではない」と述べることで、この区別の説明を試みてい

る（小泉 , 1968）。果たしてこの試みは上手くいくのだろうか。小泉によると、おそらくムーアは「対象に所属する固有性 (property) と価値評価直覚の所与となる性質 (quality) との区別を立てようと試みている」と考えられるのである（小泉 , 1968）。つまり、黄色は対象の自然的内在的固有性であるが、善は対象の非自然的内在的性質ということになるだろうか。ここで、ラスキンの固有価値論に目を転じてみると、「固有価値とは生を支持する絶対的力である」という言明における「固有価値」は、おそらく対象における「善」なる性質と言っていいだろう。そうすると、その後に続く「生を支持する絶対的力」なるものは、「善」が適用された、善とは別の何か、すなわち対象の「固有性」である可能性が高い。そうだとすれば、そしてこの言明が、「生を支持する絶対的力」のみが「固有価値」であると述べているのであれば、これはムーアの言う誤謬に当たるだろう。しかし、もう一つの可能性として、「生を支持する絶対的力」が「善」なる性質であると言えるならば、この言明は非自然主義的ということになるのではないだろうか。

この先に考察を進めるには、我々の力が不足していると言わざるを得ないが、こうした問題は、筆者らが以前考察したロックの一次性質・二次性質に関わらせて検討できるかも知れない（橘高・三好 , 2016）。他方、ムーアによる「善」なる性質の定義（それは定義できない訳であるが）にも、何か問題があるように思える。ムーアは、何を「善」と見るかについて、彼自身の直観以外に正当化の基礎を求めない「直観主義」の立場を取るのであるが、その場合、他者がこれをどう認識するのかも気になる。ところで、ムーアの内在的価値とラスキンの固有価値は、どちらも intrinsic value であり、言葉の上では全く同じものと言えるが、仮に固有価値論の言明が自然主義的であった場合、その意味するところがムーアの内在的価値と異なるはずである。そうした場合、固有価値論をどうとらえ直せばいいだろうか。ここでは、Frankena(1973) による価値の分類を足掛かりとして検討してみる（表 1）。

表 1. 道徳外の価値（Frankena, 1973 より）

A. 効用価値	ある目的に対する有用さのために善であるもの。
B. 外在的価値	善であるものへの手段であるために善であるもの。
C. 固有の価値	その観照の経験がそれ自体善であり、観照に値するものであるがために善であるもの。
D. 内在的価値	それ自体において善であるか、それ自身の内在的属性のために善であるもの。
E. 貢献的価値	内在的に善である生活に資するか、その部分であるために善であるもの。
F. 究極的価値	全体として善であるもの。

フランケナは、我々が何かを「善い」と表明する時に、概ね六つの異なる意味からこれを使い分けているとして、人物や行為や動機以外のあらゆる事物に関する「道徳外の

価値」の分類を示している[10)]。まず何らかの目的にとって「役立つ」すなわち効用があると言う場合、そして何らかのよい目的のための手段が「外在的」によいと言う場合、また芸術作品や自然美を観照する際にその経験に「固有の (inherent)」よさがあると言う場合、さらに事物「それ自体において、目的として、内在的に (intrinsically)」よい、望ましい、値打ちがあると言う場合、もしくは内在的によい生活に資する意味でその経験が「貢献的に」よいと言う場合などである (Frankena, 1973)。この分類で注目されるのは、「固有の価値」と「内在的価値」が異なる意味によって示されている点である。固有の (inherent) 価値とは、フランケナによれば、ある経験がある一つの価値判断に必ず到達するような、言い換えれば絶対的な価値ということであり、その意味で固有の価値はなお外在的な領域にとどまっていると言えるだろう。こうした点は、固有価値を絶対価値と同一視するスロスビーの見解とも符合する。また、固有価値の受容過程を重視するラスキン自身や池上の考えにも近いのではないだろうか。したがって、この「固有の (inherent) 価値」の意味で固有価値論をとらえ直すこともできそうである。他方、内在的 (intrinsic) 価値とは、目的としての善と手段としての善という分離が完全に消失し、それ自体の内属的な目的として、あるいはその性質として善であるような価値である (Frankena, 1973)。これはほぼ、ムーアの内在的価値に一致すると言えるだろう。

５．結論

本稿では、ラスキンの固有価値論を他の価値論と比較検討した上で、これを価値論史の中に位置付けることを目的として考察を進めてきた。第二章では、ラスキン思想に対するこれまでの評価を概観した。肯定的なものと否定的なものが見られる中で、固有価値論そのものを対象とした評価は最近になっていくつか現れているのがわかった。これらは、文化的領域の価値評価を経済学に含める上で、ラスキンの固有価値論が有効であるとの考えから評価するものであった。しかし、何故それが有効と言えるのか明らかとは言えず、この問題は、固有価値論の言明様式を検討することで解消すべきと考えた。

第三章では、種々の価値論がどのように語られてきたかを明らかにし、そこへ固有価値論を位置付けることを試みた。まず、「価値論の歴史」ないし「価値論史」と銘打たれた論考を見ることで、種々の価値論を総覧した。結果的にこのタイプの著述は少なかったと言える。他に、「価値論」、「価値」といった言葉を含む論考を渉猟することで価値論の分類を試みたが、概ね、哲学的価値論、経済価値論、倫理学的価値論の三種に分かれることがわかった。

第四章では、文化的領域の価値評価において何故固有価値論が有効と考えられるのか、そして固有価値論は Moore(1903) の言う自然主義的誤謬に当たるのではないか、という問題について検討した。前者の問題は、我々が文化に対して抱く絶対的な評価を求める感性が、こうした考え方をもたらすと説明できた。また後者の問題については、ムーア

における善の性質の解釈に難航し、明確な判定はできなかったものの、仮に固有価値論が自然主義的誤謬に当たる場合に、固有価値をムーアの内在的価値から区別するため、別のとらえ方の可能性を探った。

以上の検討を通じて、ラスキンの固有価値論における言明様式の特徴をとらえることにより、価値論としての可能性と限界を明確化できた。それにより、これまでのラスキン評価に見られた極端な肯定や否定に影響されることなく、中立的な視点でこれを評価し、価値論の歴史に位置付けることができた。ただし、ムーアの内在的価値との類似性や違いに関して不十分な考察となったことから、この点に関しては今後も検討を続けることとする。一つ言えるのは、固有価値論がムーアの言う自然主義的な側面をわずかながら持つのは確かであるが、しかしそのことによって、善の性質を言明する際の極端な直観主義を回避し、自然主義と直観主義の間隙を突く形で「善」と「力」の関係に依拠しつつ、これを言明する可能性が開けるものとも考えられる。今後は、筆者らが検討してきたプラグマティズムやアブダクションとも関係付けて検討したい。

註

1）ラスキンの固有価値論においては、価値が事物に内在するという実在論的な側面と、その価値が観念として受容されるという観念論的な側面とが両立している。この価値と価値観念との関係性は、価値受容という一つの機能状態を表しているものと我々は考え、これを機能主義の観点からとらえた。

2）橘高彫斗 ,「ジョン・ラスキンの受容能力概念について」, 日本生活学会 2014 年度研究大会 , 2014.5

3）橘高彫斗 ,「機能主義の観点から見る自然資本と文化的価値」, 文化経済学会＜日本＞関西支部会 , 2014.6

4）橘高彫斗 ,「ジョン・ラスキンの固有価値論と経済的価値概念について」, 文化経済学会＜日本＞ 2014 年度研究大会 , 2014.7

5）橘高彫斗 ,「ラスキンの建築論と自然観―パースの現象学を手がかりとして―」, 文化経済学会＜日本＞ 2015 年度研究大会 , 2015.7

6）ラスキンの絵画論、建築論、社会経済思想に関してはラスキンの生前以来多くの研究があるが、固有価値論に関しては近年ようやく文化経済学などの領域で研究が開始されたところである。代表的なものとして池上 (1991, 2003)、Throsby(2001, 2011) などが挙げられる。

7）スミスは、商品の真の価値がその生産に要する労働量によって測られるとしながら、実際にそれがわかるのはその商品を別の商品と交換する時であり、交換において両商品に関わる労働量が概ね等しいという合意がなされると見ていた（星野 , 1999）。つまり、価値は市場の駆け引きや交渉によって調整される。また、才能や技能など創意による労働に対しては、時間に相当する以上の価値を与える必要があるとし、こうした価値はその商品の取引＝交換に関わるすべての人々が労働評価主体となることに

よって相互に評価されると見ていた（星野 , 1999）。このようにスミスは、市場での相互評価過程から生じる「相対価値」を支配労働価値説として絶対的な投下労働価値説に関連付けたが、他方リカードは、効用が価値の尺度たり得ないとの考えから、相互評価過程を織り込み済みの相対価値＝絶対価値と見なし、議論を投下労働価値説に限定した（星野 , 1999）。つまりスミスには、客観的絶対的な労働価値と主観的相対的な使用価値が二元論的に併存していたが、リカードには客観的絶対的＝相対的な労働価値しかなかったのである。

8）Bailey(1825) は、価値とは商品間の交換比率であり究極的には交換当事者の感情、評価に外ならないとする徹底した相対価値論の立場を示した。当初は古典学派の厚い壁に阻まれ評価されなかったが､その後 Schumpeter(1954) がベイリーを再発掘した（山野 , 1963）。

9）リカードは、諸商品の相対価値が変動した際に、いずれの商品の真実価値が変動したかを明らかにする必要があるとし、貨幣が不変的な価値尺度となるべきと主張したが、それはつまり貨幣生産に関わる労働が不変であるという投下労働価値説に基づいていた。しかし、実際には貨幣価値は変動するため、貨幣は価値尺度として不適当とも言っている。ベイリーはそれに対して、価値尺度としての貨幣は不変である必要はなく、リカードは価値尺度としての貨幣と支払貯蔵手段としての貨幣をはき違えていると指摘する（橋本 , 1965）。つまりリカードは、貨幣が価値尺度として不変であるかどうかではなく、貨幣が価値として不変であるべきと主張すべきだった。貨幣の価値が不変であると仮定できるのは、労働の価値は不変であるとの前提があるからである。これに対してベイリーは、価値の原因は交換の際に現れる感情にあるとし、これは強度によって量的に表されるものであり、質的なものではないとしている（橋本 , 1965）。

10）Frankena(1973) によると、道徳的判断には「道徳的義務の判断（義務判断）」と「道徳的価値の判断（徳性判断）」があるとされる。両者の違いは、前者がある人の特定の行為の正しさや義務、それが行なわれるべきかそうでないかなどを述べるのに対して、後者は人物、動機、意図、性格などが道徳的に善いか悪いか、有徳か悪徳か、責任があるかないかなどを語るという点にある。これらに加えて、さらに「道徳外の価値の判断」があり、これは人物や行為や動機などではなく、それ以外のあらゆる種類のものに対する評価であるとされる (Frankena, 1973)。我々は通常、価値判断という言葉をこの「道徳的価値の判断」と「道徳外の価値の判断」の両方の意味で用いているように思われる。例えば、「勇敢な人は善い」という判断は道徳的価値の判断であるし、「人の心を鼓舞し活気付ける事物は善い」という判断は道徳外の価値の判断であるが、どちらも価値判断には違いないと我々は見なしているだろう。

引用文献・参考文献

Bailey, S. (1825), *A Critical Dissertation on the Nature, Measures and Causes of Value, chiefly in reference to the Writing of Mr. Ricardo and his Followers*, Author of Essays on the Formation and Publication of Opinion

Conner, S. (1992), *Theory and Cultural Value*, Blackwell Publishers, 1992

Geddes, P. (1884), *John Ruskin, Economist*, Edinburgh

Frankena, W. K. (1973), *Ethics*, Prentice-Hall, INC.

Hall, E. (1952), *What Is Value? An Essay in Philosophical Analysis*, Routledge & Paul

Hall, E. (1961), *Our Knowledge of Fact and Value*, The University of North Carolina Press

Hare, R. M. (1981), *Moral Thinking, Its Levels, Method, and Point*, Oxford University Press

Hobson, J. A. (1898), *John Ruskin, Social Reformer*, James Nisbet & Co., Limited

Hobson, J. A. (1914), *Work and Wealth: A Human Valuation*, The Macmillan Company

Hutter, M. (2006), Value and Valuation of Art in Economic and Aesthetic Theory, Ed. by Victor A. Ginsburgh and David Throsby, *Handbook of the Economics of Art and Culture*, Elsevier B.V.

Moore, G. E. (1903), *Principia Ethica*, Cambridge University Press

Oates, W. J. (1963), *Aristotle and the problem of value*, Princeton University Press

Pearce, D. (1992), *Economic Valuation and the Natural World*, Background Paper for World Development Report 1992

Ruskin, J. (1862)[1905], *Unto This Last: Four Essays on the First Principles of Political Economy*, The Works of John Ruskin Vol.17, ed. by E. T. Cook and A. Wedderburn, Longmans, Green and Co., London (=2008, 飯塚一郎他訳『この最後の者にも , ごまとゆり』中央公論新社)

Ruskin, J. (1872)[1905], *Munera Pulveris: Six Essays on the Elements of Political Economy*, The Works of John Ruskin Vol.17, ed. by E. T. Cook and A. Wedderburn, Longmans, Green and Co., London（=1958, 木村正身訳『ムネラ・プルウェリス』関書院）

Schumpeter, J. A. (1954), *History of Economic Analysis*, Allen & Unwin, 1954

Sewall, H. R. (1901), “The Theory of Value before Adam Smith”, American Economic Association（=1972, 加藤一夫訳『価値論前史』未来社）

Shaw, B. (1921), *Ruskin's Politics*, The Ruskin Centenary Council

Smart, W. (1880), *John Ruskin, his Life and Work*, Inaugural Address delivered before the Ruskin Society of Glasgow

Stimson, F. J. (1888), Ruskin as a Political Economist, *Quarterly Journal of Economics*, Vol.II, pp.414-445

Throsby, D. (2001), *Economic and Culture*, Cambridge University Press（=2002, 中谷武雄 , 後藤和子監訳『文化経済学入門』日本経済新聞社）

Throsby, D. (2003), Determining the Value of Cultural Goods, *Journal of Cultural Economics*, No.27, pp.275-285

Throsby, D. (2011), The Political Economy of Art: Ruskin and Contemporary Cultural Economics, *History of Political Economy*, Vol.43, No.2, pp.275-294
池上淳 (1991),「固有価値の経済学」,『経済論叢』第 148 巻第 1・2・3 号 , 1-21 頁
池上淳 (2003),『文化と固有価値の経済学』岩波書店
伊藤邦武 (2010),「哲学史と経済学」,『三田学会雑誌』第 103 巻第 1 号 , 5-23 頁
大江清一 (1957),『哲学的価値論の研究』弘文堂
大熊信行 (1921),「社会思想家としてのラスキンとモリス」,『商学研究』第 1 巻第 2 号 , 1921, 529-579 頁
小倉志祥 (1973),『価値の哲学』東京大学出版会
小幡道昭 (1988),『価値論の展開』東京大学出版会
加藤尚武 (1997),『現代倫理学入門』講談社
金子武蔵編 (1972),『価値』理想社
河上肇 (1917),「Unto This Last を読む」（一）,『経済論叢』第 4 巻第 4 号
河上肇 (1918),「Unto This Last を読む」（二）,『経済論叢』第 6 巻第 4 号
橘高彫斗 (2015),「ラスキンの固有価値論とパース記号学―固有価値の受容における推論過程について―」,『文化経済学』第 12 巻第 1 号 , 40-52 頁
橘高彫斗・三好恵真子 (2016),「ラスキンにおける美の観念とプラグマティズム―パース現象学から見る色彩と形態の相関性―」,『人間科学研究科紀要』第 42 巻 , 369-386 頁
木村正身 (1949),「ジョン・ラスキンと経済学」,『香川大学経済論叢』第 22 巻第 2・3 号 , 214-242 頁
木村正身 (1953),「ジョン・ラスキンの社会政策思想」,『香川大学経済論叢』第 26 巻第 2 号 , 25-65 頁
小泉仰 (1968),「十九世紀価値論への挑戦―G・E・ムーアの価値論―」,『岩波講座哲学』第 9 巻 , 岩波書店
小山春平 (1968),「価値研究の課題」,『岩波講座哲学』第 9 巻 , 岩波書店
杉村廣藏 (1931),「価値論史」,『岩波講座哲学』第 4 巻 , 岩波書店
杉村廣藏 (1933),「文化価値主義の経済哲学」,『経済学全集』第 9 巻 , 改造社
杉本栄一 (1981),『近代経済学の解明』岩波書店
鈴木勇 (1991),『経済学前史と価値論的要素』学文社
高橋誠一郎 (1929),「経済学前史」,『経済学全集』第 32 巻 , 改造社
渡植彦太郎 (1972),『経済価値の社会学』未来社
西沢保 (2014),「厚生経済学の源流―マーシャル、ラスキン、福田徳三―」,『経済研究』第 65 巻第 2 号 , 97-112 頁
橋本比登志 (1965),「R. ローナー著『サミュエル・ベイリーと古典派価値論』1961 年」,『経済学論究』第 19 巻第 1 号 , 155-163 頁
碧海純一 (1968),「事実と価値」,『岩波講座哲学』第 9 巻 , 岩波書店

星野彰男 (1999),「価値論におけるスミスとリカードの相違」,『経済系：関東学院大学経済学会研究論集』第 200 巻 , 2-11 頁
山口重克 (1996),『価値論・方法論の諸問題』御茶の水書房
山下正男 (1968),「価値研究の歴史」,『岩波講座哲学』第 9 巻 , 岩波書店

Placing Ruskin's Intrinsic Value Theory within the History of Value Theories

Horuto KITTAKA and Emako MIYOSHI

In this paper, the authors compare the theory of Ruskin's intrinsic value with other value theories and then place Ruskin's theory within the history of value theories in general. Through this comparison, they are able to expand on both the possibilities and limits of value theories and explore the definite statement style that defines Ruskin's theory of intrinsic value.

Ruskin's intrinsic value is placed in absolute value in economic axiology, but it is not always intuitionism, because it is utility in naturalism or cultural value in emotivism which connects the utility and the absolute value rather than that. Even if Ruskin's theory is naturalism that Moore says, it seems to be able to evade intuitionism when we define a property of good, and define it as the theory hits a gap between the naturalism and the intuitionism or depends on relations of "good" and "power".